

「緑のオームと三つの宝もの」

近藤伊津子編

— 中国のむかし話 —

した。鳥かごの小鳥をぼんやりとながめていると「心やさしい人、わたしをたすけておくれ！」と、どこからか声がしてきました。

息子がおどろいて頭をあげると、籠の中のオームが言っているのがわかりました。嘴が赤く、緑色の羽毛は翡翠のように美しいオームでした。

息子は思わず手をのばして、籠を開けてしまいました。オームは飛んでいき、鳥売りの主人は、とても怒ったので、息子は、持ち金を全部はたいてしまいました。

文なしになった息子は、家に帰ることも出来ず、足のかまくまに歩いて歩いて歩きました。いつのまにか森の中に入りこみ、それでも歩いていると、「やさしい人よ、わたしのあとについておいで」と、聴き憶えのある声がかこえて来ました。緑のオームが現われ、息子の前を高く、あるいは低く飛び、ある大きな木のそばまで行って「この木の下に黒いめんどりがある。金の卵を生む」とり。早くつかまえてお帰り」といいました。

息子は市いちに行き、鳥売りのところで、ふと足を止めま

息子は黒いめんどりをつかまえて、これで母親をよろ

こぼせることが出来ると、足取りも軽く家に向いました。途中で、夜になってしまったので、ある宿屋に入り、その主人に「これは、金の卵を生むめんどりだ。

どうか、大切に今夜一晚、あずかってほしい」と頼みました。それを聞いた宿屋の主人は、金の卵を生むという、ふしぎなめんどりを、どうしても、自分のものにしたくなり、夜中に、普通の黒いめんどりととり替えました。

翌朝、何も知らぬ息子は、黒いめんどりをかかえて、家に帰り、さっそくにおっかさんの前で、「黒いめんどり、黒いめんどり、早く金の卵を生んどくれ！」と言うと、ぼろんと白卵を生みました。

がっかりした息子は森にとんで行き、オームにわけを話すと、オームは「やさしい人よ、悲しまないでおくれ。この山のふもとに小さい寺がある。そこには、青いテーブル掛けがある。早く、それを持ってお帰り。いつでも、ごちそうが出て来るテーブル掛け、早く持ってお帰り」。息子はその寺に行ってみると、青いテーブル掛

けがありました。ために「ごちそうを出しとくれ」と言うと、肉に、酒と、おいしいものが、たべきれぬほど出て来ました。

その日も、息子は、この前と同じ宿屋に泊り、夜中になると、青いテーブル掛けで、ごちそうを出して食べたので宿屋の主人は、それをのぞき見て、またしても、その青いテーブル掛けを自分のものにしたくなりました。息子が朝、目をさます前に、ふつうの青いテーブル掛け、とり替えました。

翌朝、何も知らない息子は、青いテーブル掛けをもって、家に帰りました。そして、さっそくにおっかさんの前で、「青いテーブル掛け、早くごちそうを出しとくれ」といいましたが、ごちそうは何も出ません。

息子は、とても悲しんで森に行き、大きな木の下で泣きました。オームがやって来て「やさしい人よ、悲しまないでおくれ。この山の後の小川のほとりに、一本の黄色の棒がある。早く、とってお帰り、早く取ってお帰り」と言いました。息子が小川に行ってみると黄色い棒

が一本あったので、それをひろって、又、あの宿屋に泊りました。

でした。

(かっこう文庫主宰)

宿屋の主人は、夜中になると、そっと息子の寝ている部屋にしのび込み、あの黄色の棒を見つげようとしましたが、暗くて見えません。その時、寝ている息子が「黄色の棒、性悪ものを打っとくれ」とつぶやくや、暗やみの中から、黄色の棒が飛んで来て、主人を打って打って、うちのめしました。主人は打たれながら「あゝ、許してくれ。全部返すので、許してくれ！」と叫びました。息子は、大声に、びっくりして目を覚し、主人から、わけをきいて、やっと今迄のことがわかりました。宿屋の主人は、盗んだ黒いめんどりと、青いテーブル掛けを、息子に返しました。

息子は、今度こそ、ほんとに金の卵を生む黒いめんどりと、ごちそうを出す青いテーブル掛けと、黄色の棒をかかえて、家に帰りました。

それから、息子とおっかさんはいつまでも、幸せにくらしめました。息子はもうオームに会うことはありません